

美術館では多くの場合、テーマに即した作品の展示と、作品のための様々なテキストによって、観者は美術館の考える文脈のなかへ導かれる。その中で最小のテキストであるキャプションは、作者名と作品名の表記を核として、アイデアや物質として存在するものを美術作品へ変容させるものとして機能している。

同時代の作品を扱う美術館では、かつてはアトリエで完成した作品をそこから直接、あるいはコレクターのもとから集め、学芸員が中心となって展示を行うことが過半であったが近年、美術館の展示室がインスタレーションをゼロから創り上げる場となったり、美術館が美術家に収蔵作品の制作を委託するなど、美術館は様々なかたちで作品生成のプロセスに深く関わるようになってきている。また美術館での作品の制作や展示において、ボランティア等複数の人が関わることも増え、更に来館者が鑑賞の際にただ観るだけでなく積極的なアクションをおこすことで作品が成立し、形状が変化し続ける場合も少なくない。即ち同時代の美術館は、学芸員による完成作の展示を通じた編集による意味生成だけでなく、多様な担い手による作品生成の場としての役割も担うようになってきている。また作品の素材、技法やコンセプトは多様化し、美術館で展示される作品や資料をめぐる考え方は、展示や貸出しを繰り返すなかで変容している。そのような作品をめぐる変化は、美術館の展示行為としてあるキャプションに集約的に現れているように思われる。この小さな場を通して、同時代美術館における作品の生成をめぐる現状を考えてみたい。

キャプションの記述は作品の解説と比べた場合、客観的なデータと見なされがちだが、記載項目の設定に、作家や作品をめぐる枠組みの現状が示されている。それゆえ近年の作品生成をめぐる変化は、キャプションにおいて、制作過程における関与者をめぐる問題、資料か作品なのかという分類の問題、そして素材や技法の表記の揺らぎや課題として現れているのである。

まず制作に関わる者の表記だが、近代以前の作品を展示する博物館等では、作者は作品名の後に記されるのに対し、同時代美術館の場合、まず何よりも作者の名前がキャプションの中で最初に大きく書かれ、そのあとに生没年が続く。次の行にはタイトル、制作年が記され、その下に素材や技法等が付されるのが一般的である。当該作品がこの作者のなかの、どの時期に制作されたものなのかという位置づけが上下の数字を対照することで簡単に諒解される。このように特化されてきた作者の存在は、鑑賞者が作品の成立や構成に深く関わるようなタイプの近年の作品のキャプションでは、コンセプトを考える作者だけでなく、作品生成の過程に関わるひとびとの存在をも併記することでより鮮明に、作品の新たな意味が現れてくると考えられる。

また美術館で当初、展示されたときや収集された際には、資料として分類されたもの、例えば作品や展覧会のコンセプトを記したテキスト類や展示の記録写真なども、ときを経

て、作者自身が作品として定義し直す場合もあるだろう。草創期のミュージアムには包含されながら、近代以降の美術館が「美術作品」の外側に排除してきたものを含め「資料体」として受け入れ、収蔵後に、展示を繰り返すなかで新たな意味が生成され、定義が更新されることを積極的に考えていく時期かもしれない。更に、素材や技法の表記の中でも、日本画や工芸のように伝統的なものが色濃く続いている分野については、それぞれに特有の表記を続けるのか、素材だけを列記するのか、作者の意向を汲みながら検討することが必要であろう。また展覧会を期に再制作された作品の制作年やタイトルの表記もコンセプトを斟酌しつつ統一性を保つ方法を模索しなければならない。以上のように、作品制作と展示を通した絶えざる意味生成の場としてあり続ける美術館においては、キャプションもまた、揺らぎながら変容する意味生成の場として存在するのではないだろうか。